

翻訳 ゲーテの歌唱劇『漁師の娘』

Eine Übersetzung von Goethes Singspiel: „Die Fischerin“

栗花落 和彦

『漁師の娘』

歌唱劇

ティーフルトの野外舞台にて上演

1782年

登場人物

ドルトヒェン

その父

ニークラス その許婚

隣近所の人々

河畔の高い榛はんの木の下に漁師小屋が散在している。夜と静寂に包まれている。小さな火には深鍋が掛けられており、網と漁具がその周囲に立て掛けられている。

ドルトヒェン（仕事をしながら歌う）

誰だろう こんな夜更けに 夜風を衝いて疾駆するのは？

わが子を乗せた父

父は息子を大事に腕に抱き

しっかりと掴んで 暖かく抱え込む

坊や 何がそんなに怖くて顔を隠すんだい？——
 父さん 見えないの あの魔王が？
 王冠を戴着て 長い裾を引いた魔王が？——
 坊や あれは柵引く霧だよ——

可愛い坊や おいで 俺と一緒にいこう
 実に素敵な遊びを 坊やと一緒にしよう
 岸边には 幾つもの花が色とりどりだ
 俺のお袋は 金色の衣裳持ちだよ——

父さん 父さんったら 聞こえないの
 魔王がぼくにそっと約束する声が？——
 落ちていて 落ちていておいで 坊や
 枯葉にさやいでいるのは 風だよ——

可愛い坊や 俺と一緒に行かないかい？
 俺の娘たちに 上手くお守りをさせよう
 俺の娘たちは 夜の踊りの輪をこしらえて
 坊やを揺すっては踊り 歌っては寝かせてくれるよ——

父さん 父さんったら あそこに見えないの
 薄暗がりにいる魔王の娘たちが？——
 坊や 坊や 父さんにははっきりと見えるよ
 老いぼれたしだれ柳が ほら 灰色に見えるんだよ——

俺は坊やが好きなんだ 坊やの美しい姿が堪^{たま}らないんだ
 いやだと言うんなら 力ずくだぞ！——
 父さん 父さんったら 今こそ魔王がぼくを掴まえるよ！
 魔王は ぼくにひどいことしたよ

父はぞっと身震いし 疾駆する
 両腕に 喘ぎ苦しむわが子を抱き締めたまま

辛くも屋敷に辿り着く
父の両腕の中で 子どもは死んでいた^①

さて、あたしは待ち切れないあまり、持ち歌を全部二回歌い切ってしまったけど、三度目を始める必要があるそうね。あの人たちはまだ帰ってこない！ 帰ってこないの！ またいつもみたいに外に出てるんだなんて、鼻持ちならないわ。今日はちゃんと遅れずに帰ってくるって、あれほど誓って約束したのに。じゃがいもは煮崩れてお粥かゆみたいになったし、スープは焦げついてしまったわ。あたしはお腹がすいてるの。自分の分をひとりで食べるのを一刻また一刻と延ばしてるのは、あの人たちが帰ってくる、帰ってくるに違いないって、ずーっと思ってるからよ。男どもにかかってはいくら努力しても無駄骨ね。だって改心の見込みなんか、なしだもの。あたしは脅かしたり、ぶつぶつ文句を言ったり、しかめっ面をしたり、食事を台無しにしたりしたわ。そんなことをしてもどうにも効き目がない時は、ご丁重にお願いしたけど、あの人たちは来る日も来る日も自分流儀に振る舞うの。ニークラスが一番癪に障るわ。なぜって、あの人は、俺はお前のことが好きなんだ、ってみたいに、お前の目から何もかも読み取ってやるぞ、ってみたいに、奇跡を起こしたがってるんだから。何しろそうなると、お前はもう俺のカミさんなんだ、ってみたい仕打ちをするんだから。せめて骨折り甲斐があれば、まだしも全て良しってとこなのかも知れない。舟が沈むくらいの漁の獲物を随分積み上げて、いくらかでも市場へ運べるなら、まだしも良しってとこなのかも知れないわ。それならあとからもまたお金をいくらか自分に振り向けられるし、しょっちゅうあんな粗末なものを飲み食いしたり、見窄らしい恰好をする必要がないんだもの。まるっきりその反対なんだわ！ 獲物が少なければ少ないほど、帰ってくるのが遅いのよ。この間の晩、あの人たちのやってる様子を丘から眺めてると、こっちはいらいらのあまり死んでしまいそうだったわ。結構澁刺として櫂を漕ぐどこか、小舟を流れに任せて、悠然とパイプを燻らしてるの。そこに岸辺の小径をやって来る人もいれば、馬たちを駆って水浴び場に連れてくる人もいるわ。そうなると、こんちは、お晩です、の挨拶が交わされて、切りがないの。こっち側から乗り着ける人もいれば、向こう側から乗り着ける人もいるわ。飛び抜けて不運なのは、酒場が河辺に面してる、ってことね。あの人たちはきっとまた舟から上がって、愉快にやってるんだ

わ。で、帰ってくると、また一杯やりたがるのよ。ほんとにいやだわ！ 真面目な話、ほんとにいやだわ！

男たちのことであくせくするのが
 悲しいことに あたしたちの定め
 あたしたちは 男たちの好きにさせ
 思いの通りに従うの
 ありがたいってせめて思ってくれたら
 まだしも全て良しってとこね

でも時として 心のうちで疼くのは
 不満の思い
 でも言われるの 静かに！
 静かにしろ！ 恋しいお前！って

でもあたしだって これ以上
 気まぐればかりにつき合っていたくない
 何でも言いなりになりたくはない
 思い通りにしたいの！

あの人たちを本気で怒らせることを何かせめてやってみられたら、いいんだけど！ 怒った振りをすれば、愛想のいい顔をするし、鉢物を押しやると、平気の平左で食べてる。こちらが隅っこに腰掛けると、自分たちだけで話をしてる。女どもは大のお喋りだって、しょっちゅう言われるけど、男どもが話し出すと、全く切りがないわ。こっちは寢床に横になって、火が消えるに任せておきたいわ。そうなったら、誰がお給仕をしてくれるのか見てるがいいのよ。そうだわ、こんなことして何の役に立つっていうの？ そうなっても定めし、あの人たちはあたしを寢かしたままほおっておくでしょうよ！むしろこっちとしては、喧嘩をして騒いでくれるほうありがたいくらいだわ。無頓着な男どもくらいぞっとするものはないわ！こんなに怒りが治まらないなんて！こんなに頭がおかしくなるなんて！何から始めていいのかまるっきり分からないわ！ 我と我が身に何かひどいことをしてしまいた

いくらいよ！ あの人たちのお陰で結局のところ、こっちのほうが今に気が狂うでしょうよ！ 我慢ができなくなったら、水の中に飛び込んでやるわ！ そうなったらドルトヒェンみたいな女にどこでまたありつけるのか、見てるがいいわ。あの人たちの身の回りの物をこの通りきちんとしては、やることなすことに我慢して、家から出ないで万事に気を配るあたしみたいな女にね。あたしが死んだら、どんなにあたしを傷つけたのか思い知るでしょうし、自分たちは恩知らずだったって、我が身を責めることでしょよ。(泣き出す) そうなったらあの人たちは髪の毛を掻きむしり泣き叫んで、もっと早く家に帰ってこなかったことを悲しむでしょう。でもこんな風にあの人たちのせいで心を暗くするなんて、あたしはほんとに愚かだわ！ あの人たちは家に帰ってきたら、全く何ごともないみたいな顔をしてる。こんなにしょっちゅうつまらないことであたしを心配させることだけでも、罰してやれるかもね。何か災難が起こったんだわ、とこっちが思っていると、あの人たちは火酒を美味しく飲んでるんだわ。——そうだわ、こうしてやろう！ 身投げをしたみたいに見せかけよう。釣瓶の片方を隠して、もうひとつを台に乗せ、ちっちゃな帽子を藪に掛けておこう。あたしが身投げをしたと思わせた挙げ句、存分に笑い飛ばしてやりたいわ。(遠くから歌う声が聞こえる) 早速遠くからあの人たちの声が聞こえるわ。(万事準備を整え、釣瓶を置いて、小さな帽子を藪に掛ける) こうすれば本物そっくりに見えるわ！ さあ、あんたたち、今に見てらっしゃいよ！（隠れる）

父とニークラス（遠く、小舟の中で）

漁師が網を打って
 小魚を捕まえる時
 心静かに 期待に満ちて待ち受けると
 多くの獲物が手に入る
 心急^せいて 網を打つと
 心暗く 空しく帰路に着く

それなら 日を改めて
 小舟で再び乗り出せば
 ありがたくも豊かな獲物に

舟は危うく沈むところ
 こんな風に 俺たちは船出した
 心満ち足りて 獲物豊かに家路に着く

- ドルトヒェン（再び姿を見せる）心配と言っていいくらいになってきたわ！
 できれば帽子を元通り片付けたいんだけど！ そうしたほうがいいかしら？
 しないほうがいいかしら？ あの人たちは全く近づきすぎてるわ。このまま
 にしておく他ないわね。
- ニークラス（舟から飛び出してくる）停まれ！ 舟はしっかりと繋ぎたいもんだ。
- 父 あれこそいっばしの漁ってやつだった！
- ニークラス まる一年で一番見事なもんですよ。
- 父 それにあんな思いがけずにな！ あんなもん思いも及ばなかったぞ。ほれ、
 急げ！ そのまんま全部生け簀に入ったらいいのだが、明日の朝までな。
- ニークラス 全部は入り切りませんよ。
- 父 少しは桶に置いておこう。ただ夜になると、もう一度真新しい水を欲しが
 るに違いないな。
- ニークラス こいつは俺に任しておいて。
- 父 こっちに寄せ。そいつはわしが運んでいきたいからな。
- ニークラス さあ、^{おか}陸に上がって、ゆったり休んで。ドルトヒェンにこの事情
 を話して、飯の支度がどうなってるのか見てくださいよ。これほどの幸運を
 抱えて戻ったんですから、きっと愛想のいい顔を拝ましてくれるでしょうよ。
- 父 お前じゃ仕事が終わらんぞ。
- ニークラス すぐに！ すぐですよ！ 俺がどんなに手早いか、見ていてくだ
 さい。
- 父（陸に上がりながら）何と言っても、大漁だったのと、坊主で終わったのと
 は大違いだな。大丈夫か？ 上手くやれるのか？
- ニークラス 全く上々ってとこですよ！
- 父 ドルトヒェン！——どこに隠れておるんだ？ ドルトヒェン！（娘を至る
 ところ捜し回る）さて、どこへあいつは迷い込んだのやら！（鍋の中を目に
 しながら）こりゃあ、手近に水がないみたいに、何もかも煮詰まっておる。
 下手すりゃ焦げつくぞ。ニークラス、さっさと終わるんだ！ ドルトヒェ
 ンは現におらんし、わしらのご馳走は煙となって消え失せるぞ。

ニークラス ズーゼンのところにいるんでしょう。いいから、呼ぶんですね。

父 大丈夫、今に帰ってくるさ！ わしらだけで早速平らげよう。あいつは自分の分をどうせいつも先に済ませておるし、待ってられない性分なんぞでな。花嫁にしちゃあ恐ろしいほどの食欲だな。さあ、陽気にやろう！ 先ずは火酒をひと口。わしらがこいつにありつくのは定めし当然ってとこだ。

川面も 陸の上も
 漁師は上機嫌
 川面も 陸の上も
 貧しき漁師はなんとかやっっていく
 漁師には いい目も出れば 悪い目も出る

腹を空かせ 喉を乾かさんがため
 漁師は朝に舟を出し
 苦労を重ねて
 僅かな糧かてを見出す
 わしらは水に濡れても
 風に当たれば 乾いて元のまま
 いつも変わらぬ暮らし振り

ニークラス (陸に上がりながら、歌詞の最後のほうをともに歌う) これよりましな暮らしができないんなら、それも結構ってとこです。

父 それよりましな、なんてな！ ほれ、じゃがいもを食べてみな。

ニークラス 請け合えますが、町のほうが暮らしは楽ですよ。(辺りを見回す) 本当にどこにも隠れてないのかい？ ドルトヒェン！ 恋しいドルトヒェン！ 家にはいないのかい？ 身を隠してしまった、とでも？ いつもならあんなに待ち切れなくて、竈かまどから引き離すことが簡単にはできないんだが。

父 こっちに座れ！

ニークラス 料理は立ってっても平らげられますよ。

父 お前は今日あんなに思案しておったな。

ニークラス 白状すれば、あんな百姓のせがれが町へ出ると、どうして上品なご仁になるのかってことが、頭から離れないんですよ。

- 父 さても、そいつは染まるもんだな。
- ニークラス ドルトヒェンを嫁にもらったら、町で何か職を探したらいいとは思わないんで？
- 父 町の中で一体どれくらい魚が釣れると言うんだ？
- ニークラス たっぷりと！ ただし別の網を使ってね。
- 父 暮らしを立てるために、一体お前に何ができるんだ？
- ニークラス 俺なら何だって身につけられますよ。
- 父 結構な手始めだな！
- ニークラス 失うもんは何もないんですから。
- 父 素晴らしい支度があるぞ！ しかもお喋りな紹介状がな。何しろ別嬪の女がいるんだからな。
- ニークラス いや、お親父さん！ そいつは冗談じゃ済ませませんよ。
- 父 ああ、お前なら何だって身につけられるさ！
- ニークラス 女に手出ししようもんなら、きっと散々に打ちのめしてやりませよ。
- 父 だからといって、そんな殴り合いはするもんじゃないぞ。
- ニークラス ドルトヒェンは一体どこに？
- 父 あいつのことはほっといて、話しな。
- ニークラス 一体何を？
- 父 お喋りするんだな。
- ニークラス 何の？
- 父 お前の好きなことだ。
- ニークラス 何も思い浮かばないんです。
- 父 そんなら何か嘘をついてみな。
- ニークラス あのお綺麗な制服[㊤]が長いこと俺の目に突き刺さっているんです。やつらはほんとにお気楽に暮らしては美味しく飲み食いをしていて、老い込んだ日々を暮らせるいっぱしの見込みがあるってもんですよ。
- 父 そいつがどうしてもお前の頭から離れないんだな。だからといって、わしに一体どうしろって言うんだ？
- ニークラス しょっちゅう上手くおやりですよ。
- 父 だが、どんな風に？
- ニークラス あとで俺たちのとこへ引っ越せますよ。

父 馬鹿なことを言うな！ わしはお前たちを離さんぞ。この話はもうおしまいだ。

ニークラス あの娘の来るのが聞こえますね。

父 さあ食って、落ち着け。

ニークラス いや、何でもありませんでした。

父 あいつが戻ってこぬことはなからう。いわんやそのうち戻ってくるさ。

ニークラス あの娘のところへ行かせてください。

父 ひとりぼっちになるのはご免こうむる。

ニークラス 声を出してあの娘を呼びたいな。

父 まあ、くつろげたら！ 時間つぶしに、ひとつ歌うんだな。そのあとじゃ揺すってもらわなくとも眠れるだろうよ。わしは歌を聴きながらパイプを燻らそう。今日はこれで充分だ。

ニークラス あの娘がいてくれたら、俺は低いほうの音を歌うんだが。

父 それなら今両方とも全部歌うんだな。子どもじゃあるまいし！

ニークラス 一体何が聴きたいんです？

父 わしにはみんな同じだな。

ニークラス 水男の話じゃあ？

父 水男が娘っこを教会から連れ出すって話か？

ニークラス まさにその通りで。

父 一体あれには、ほんとのことがあるってか？

ニークラス とんでもない、おとぎ話ですよ。

父 そいつは全くもってでっち上げだと思ってるんだな？

ニークラス もちろんですよ！

父 何しろわしも何度か奇妙な話を聞いたことがあるもんでな。たびたび人の身にはこういったことも降りかかるもんなんだ、気味の悪い場所でな。お前は幽霊の手に触られたことは一度もないのか？

ニークラス ありますとも。でも昼間にね。

父 そんな話をするのは、わしは好かん。

ニークラス そいつは思い過ぎしてもんですよ。(歌い出す)

父 裏のほうで何かパチャンと音がしたぞ。

ニークラス そうじゃありませんったら、水の音ですよ。

父 それじゃ、さあ歌え。今じゃもうこんなに老い込んじまって、怖じ気を震

うことも時にはやっぱりあるんだな。

ニークラス それじゃ、実際また聴いてください。ぞっとするっていうより滑稽な歌ですから。

「ああ母さん 上手い知恵を俺に貸しとくれ
 どんな風に 別嬪娘をもらえばいいのやら」
 母が息子に造ってやるのは 清水でこしらえた馬
 その上 砂でこしらえた手綱と鞍
 母にめかし込まれ 息子は騎士へと化ける
 こうして乗り入れるは 聖母教会の墓地
 息子は馬を教会の扉に繋ぎ
 教会を三度四度と巡った^{たび}
 水男が教会に入り込むと
 大人も子どもも 回りにやって来た
 司祭がちょうど祭壇を前に立っていた
 「何とピカピカ輝く騎士がやって来たことか？」
 別嬪娘がくすくす笑った
 「ああ ピカピカ輝く騎士があたしのもんなら！」
 騎士は椅子を ひとつふたつと踏み越えた
 「おお 娘さん 俺に誓いの言葉と操を捧げとくれ！」
 騎士は椅子を みつつよつと踏み越えた
 「おお 娘さん 俺と一緒にいってとくれ！」
 別嬪娘は手を騎士に差し伸ばした
 「さあ あたしの操を すぐについて参ります」
 ふたりは婚礼祝いの客を引き連れ 繰り出して
 喜び溢れ 危険も知らず踊った
 踊りつつ 岸辺に降りると
 今やふたりぼっちで 手に手を取りあった
 「別嬪娘よ 俺の馬はここに留めておき
 実に素敵なお舟を 運んでこよう」
 そして ふたりが白砂に降り立つと
 あまねく舟が 陸へと向きを変えた

そして ふたりが海に降り立つと
別嬪娘は水底へと沈んだ
未だに長々と聞こえるは
水に没する別嬪娘の叫び声
乙女たち わしに耳を貸すことだ 能う限りの戒めに
水男と踊ってはならんのだ^③

父 心浮かれる踊りだな！ 心から誘われてるみたいだな！

ニークラス 叫び声が聞こえなかったですかい？

父 思い過ごしってやつだ！ 懸念してるわけじゃないんだが、何にも聞こえんな。お前の頭にはまだ歌のことが思い浮かんでるんだ。

ニークラス 本当の話、叫び声がしましたよ。歌いながら俺の心にこの通りのしかかったんです。誓ってやりたいくらいですが、何か聞こえたんですって。

父 今度はお前が始めるのか？ お偉くなったもんだな！

ニークラス あの娘の居場所が分からないうちは、落ち着かなく見えるんですよ。

父 あの娘はちっちゃな子どもじゃないし、水の中には落っこちないだろうて。

ニークラス 水男ってのは嫌なやつですよ。

父 それどこか、水女の姿も拝んでおるまい！

ニークラス いやいや、何か胸騒ぎがします。

父 お前は夢を見てるんだ。

ニークラス 災難が起こってるんですよ！ 災難がね！

父 さあ、行くんだ！ さあ、走れ。お前のお陰でわしは心配だ。わしも探したいんだ。

ニークラス ドルトヒエン！ ドルトヒエン！

父 そんなにびくびくするな。ドルトヒエン！

ニークラス 恋しいドルトヒエン！

父 さあ、落ち着け。馬鹿な真似はするなよ。

ニークラス ああ、恋しいドルトヒエン！ 恋しいドルトヒエン！

父 さあ、お前はズーゼンのところへ走れ。わしは名付け親のところへ上がってきたいから。

ニークラス あの娘はきっとここにいるはずでは。

父 そんなはずはない。

ニークラス 親父さん、俺は我慢できないんです。

父 そんなら、さあ、動いて、探してみるんだな。もしかしたらあの娘は寢床
 ですっかりお眠かもな！

ニークラス とんでもない、違いますよ！

父 最初に水を汲もうとしたんだな。ほら、釣瓶が置いてあるぞ。

ニークラス もう片方はどこに？ 見えないぞ。

父 全く分からん！

ニークラス 親父さん、ああ、親父さん！

父 どうしたんだ？

ニークラス 俺は死神に取り憑かれたんだ！

父 何ごとだ？

ニークラス あの娘は溺れたんですよ！ ここに帽子が掛かっています。水を汲
 んだ時に中に落っこちたんだ！ 親父さん！

父 見せてみろ！ 見せてみろって！ どんな災難も凌ぐ災難だぞ！

手を貸せ！ 手を貸して あの娘を救うんだ！
 あの娘が溺れてるぞ！
 軽はずみなことを
 河の中に落っこちたんだ！
 大変なこった
 何をお前は突っ立ってるんだ？

ニークラス 恐ろしさのあまり
 俺の五体全てが萎えてる
 俺は混乱のままに突っ立って
 くずおれかかる
 俺には分からない
 我が身がどうなったのか

父 隣近所は眠ってる
 起きてもらいたいんだ

起きろ！ わしらの声が聞こえるか！ 聞いとくれ！
驚天動地の叫びを聞いとくれ！

合唱（最初はひとりひとり、その後唱和して）

何ごとだ！ 誰だ
夜の夜中 わしらに叫びを上げるのは？

父

手を貸せ！ 手を貸して あの娘を救うんだ！
あの娘が溺れてるんだ！
軽はずみなことを
河の中に落っこちたんだ！
大変なこった
何をあんたらは突っ立ってるんだ？

一同（時には交互に、時には唱和して）

さあ 急ぎ駆けつけろ！
^{やな}築のところへ走るんだ！
十中八九 あの娘は引っかかっている
付け木に火を点けて
^{たいまつ}松明を灯し
焚き火を起こせ！
素早く舟のところへ！
こっちに竿を！
あの娘を探し出せ！
あの娘を拾い上げろ！
河の^{しも}下へ！
気をつけろ！ 気をつけるんだ！④

ドルトヒェン（藪の中から姿を現して）

いたずらは上手くいった
成功したわ！
だけどあの人たち あたしのことで

驚き不安がってる！
 あたしは愛する人たちに
 空しく 不安な思いをさせた
 可哀想に 気の毒したわ！
 急いで言おう
 急いで叫ぼう
 ここよ あたしは！
 まだ生きてるわ あたしは！
 まだあたしが生きてるのは ふたりのためなの（退場）

父（水から上がる）

あの娘の声が聞こえた
 お天道様！ 娘が危険から逃れておるなら！
 わしが耳にしておるのは こっちか？ そっちか？
 遠くのようにもあり 近くのようにもあるぞ

ドルトヒェン（戻りながら）

ええ 父さんはちゃんと聞き取ってくれた
 ああ あたしはぐずぐず遅れてしまったの！
 愛しい父さん あたしはここよ！
 ああ 済んだことは許して！

父 おや お前は溺れておらんと？
 濡れてるとも思えんぞ？

ドルトヒェン あたしは河に沈んでないわ
 父さん 思い違いなの

父 そら 嬉しや！
 娘が 元通り帰ってきた！
 探すのは止めてくれ！
 こっちに来て

俺と一緒に 喜んでくれ！
だが白状しろ どこにお前は隠れておったのだ？

ドルトヒエン そんなにも驚かせたのなら ご免なさい
ああ 言わせて
ふたりを困らせ
からかって
驚かせたかったの
ふたりに心配を懸けたわ
あんなにも長々と
家を空けてるんだもの

ええ、父さん、あたしを許して。ほんとにそれほど悪気があつてのことじゃないの。あたしを待たせないよう、食事時には遅れない時分に帰るよう、いつもあんなに心からお願ひしてるのは、知ってるわよね。父さんたら、あんなことしておいて、決して気を悪くしないとでも思ってるの？ あたしがあんな夜更けまでひとりっきりでいる羽目になって、父さんは外におりっぱなしで、あたしのところにできるだけ早く帰りたいと思ってるお嬢さんを引き留めておいて、あたしが決して退屈しないとでも？ こんないたずらなんか悪く取らないで、機嫌を直して。

父 このいたずら者めが！
できそこないめが！
わしらをこれほどからかうなどと！
これほど驚かせるなどと！
ニークラスは死に物狂いで
お前を救い出そうとしておる
隣近所の者たちも友だちも
寝床から飛び出し
悲嘆に暮れて
泣き叫んでは 意気消沈しておる
言うんだ 気の狂ったお前

どんな気まぐれで こんな真似など？

ドルトヒェン ほら あたしの言うこと聞いて！
 そんなに叫ばないで！
 叱るのはやめて！

父 何と言っても してやりたい
 しないわけにはいかんぞ
 お前に仕返しを！

ドルトヒェン さあ 信じて
 自分のしたことが悔やまれるの

父 我慢するのも
 ひと苦勞

ニークラス（他の人々とやって来る） ああ、お天道様、あの娘は生きてる！
 そこにいるぞ！ ドルトヒェン、どこに行ってたんだ？

ドルトヒェン 恋しいニークラス！

父 皆が来てくれるなんて、お前は運がいいんだぞ！

ニークラス さあ、言っとくれ！——お前に口づけしなくては！

父 娘はとっとと失せさせろ！ そんな喜びを受けるにはもったいなすぎる。

ニークラス 俺はまだ立ち直れないんだ。

ドルトヒェン 父さんに言って聞かせてよ。

ニークラス 親父さん、落ち着いて。この娘はいなくなってませんから。

父 冗談じゃない！ そんな話じゃないんだぞ！ こいつに相応しいのは、こいつの気まぐれを挫くことだったんだ。

ニークラス そいつはどういうことなんで？

父 ほんとに何も分からんのか？

ニークラス まだ何も聞いてませんよ。

ドルトヒェン その前にあたしを許して！

ニークラス ひと言も呑み込めないな。

父 こいつがわしらをからかったんだ。

ドルトヒェン ふたりはあたしを何度も心配させたわね。心配がどうなるのか、これでお分かりよね。

ニークラス どうして一体お前の帽子がこの藪の中に？

ドルトヒェン あたしが掛けたのよ。

ニークラス おかしな娘だ！ そいつは洒落た冗談なんかじゃないぞ。何しろ、俺たちがお前をどんなに可愛がってるか、お前は分かってるんだからな。

ドルトヒェン あれこれ考えてやったことじゃないわ。不満に襲われたのよ。許してって、あと何度言えばいいのかしら！

ニークラス ある条件の下にならね。

ドルトヒェン で、その条件って？

ニークラス お前が本気を出すことさ。で、俺たちが今日捕った魚のうちで一番見事なのを明日の婚礼のご馳走に出すことだな。

ドルトヒェン あたしのことは放っておいて！

父 実に結構なこった！ わしの思い通りになるんなら、お前には魚の骨一本たりとも拜ませではやらんぞ。はい、って言葉をまだ長々とお前の胸のうちにしまわせておいてやるからな。

ドルトヒェン そんなこと、大した罰じゃないでしょうよ。

父 覚えておれよ！ お前の言うことは言葉通りに受け取ってやる。わしの頭をこれ以上狂わせんでくれ。

ニークラス 話をやめて、親父さん。俺たちの邪魔をしないで。俺は親父さんのお許しをもらっているし、こんないたずらのせいで俺たちが——

父 で、お前たちのお喋りにかまけて忘れられちゃ困るのは、隣近所の者たちが当然ながら大いなる感謝と上等の寝酒を要求できるってことなんだぞ。何しろ無駄に目を覚まさせてしまったからな。ほれ、皆が寄り集まって、わしらが気が利くことを何ひとつ思い浮かばんのを訝しく思っておるぞ。

ニークラス 親父さんのおっしゃる通りだ。ドルトヒェン、俺たちに酒瓶を出しとくれ。皆お前のことをほんとに心に懸けてくれたんだ。お前を見つけて救い出すのに、皆全く本気だったんだ。お前が皆にどれだけ可愛がられてるか、俺は初めて分かったよ。

(ドルトヒェンは酒瓶とコップを持ってきて、酒を注ぎ、年老いた父に差し出す)

父 仲良き友の皆、重ね重ねの感謝を！ そして娘が恙なく戻ってきた今宵に、皆の健康を！ 一同に乾杯！ 今度は周りを囲んで、花嫁花婿の幸せを祈るとくれ！

一同（酒を飲む）おめでたい、乾杯！

父 お前が昨日歌い上げた娘は機転が利いて男をものにしおったが、お前はいたずらをしてかして男をものにしたんだな。お前ってやつは、何しろひとつ上手くいくまで、あらゆる手を試してみるんだからな。

ドルトヒェン ふんっ、いいじゃない！ それなら苦勞するだけの甲斐もあるってものよ。

父 國中を旅する騎士がひとり
 婚礼相手の女を探し求める
 恙なく未亡人の家の戸口に來ると
 美しき娘が三人 母の前に座していた
 騎士たるもの 長々と見つめに見つめ
 選び出す心の不安が 増すばかり

ニークラス みつつの問いに答える者 あらん？
 いずれが俺の妻か 知らんがため

ドルトヒェン みつつの問いを あたしどもに披露して
 いずれがあなたの妻か 知らんがため

ニークラス 口に上せ こちらへの道より長きは 何ぞ？
 深き海より深きは 何ぞ？
 あるいは 音高き角笛より高きは 何ぞ？
 鋭き茨より鋭きは 何ぞ？
 あるいは 緑なす草より緑なすは 何ぞ？
 女の姿より悪しきは 何ぞ？ 何ぞや？

父 ひとり目 ふたり目は 思案投げ首
 最も若く美しき三人目が 口に上した

ドルトヒェン ああ こちらへの道より長きは 愛
 深き海より深きは 地獄
 音高き角笛より高きは 雷鳴
 鋭き茨より鋭きは ひもじき思い
 あるいは 緑なす草より緑なすは 毒
 女の姿より悪しきは 悪魔

父 娘が問いに答えるや
 騎士たるもの 喜び急ぎ 娘を選び出す
 ひとり目 ふたり目は 思案投げ首
 今や 独り身騎士がおらぬのに

一同 さればこそ 可愛い娘たち ご用心召され！
 独り身騎士が問うたなら 首尾よく答えるもの^⑤

父（隣近所の人々に向かって）皆も今や寢床に戻りたいんだな？ もうちょっとだけ下に降りて、わしらがどれほどの漁を上げたのか、見ておくれ。わしは魚に真新しい水をやらねばなるまい。生け簀のひとつが粉々になっておるし、もうひとつのには皆が入るわけにはいかんし。（隣近所の人々とともに退場）

ニークラス 何をそんなにお前はおとなしいんだ？

ドルトヒェン あたしのことは放つといて！

ニークラス 俺のカミさんになるのに満足してないのかい？

ドルトヒェン まあまあってとこね！

ニークラス 俺のことが気に食わないのかい？

ドルトヒェン そんなこと言ってないわ

ニークラス 俺のことは普段見下してはないようだけど。

ドルトヒェン そんなことしないわ。

ニークラス 俺のこと、好きじゃないのかい？

ドルトヒェン あんたに肘鉄食らわしたこと、あったかしら？

ニークラス お前の言ってること、分からないよ。

ドルトヒェン あたしには厄介なのよ。

ニークラス 俺はもう行こうか？

ドルトヒェン お好きなように。

ニークラス これってつまり、花婿さんを変な具合にあしらってるってことなんだぞ。

ドルトヒェン 明日！ もう明日にして！

ニークラス 俺が好きなら、今でどうしていけないんだ？

ドルトヒェン ああ！

ニークラス どうしたんだ。お前がそんなに悲しそうにしてる姿、見てられない。俺は全然慣れてないんだ。喋ってくれ、気持ちを打ち明けてくれよ！

ドルトヒェン それが何になるって言うの？ さあ、下へ行って！ 父さんが仕事を済ませるよう、いつまでも引っかき回さないよう、手伝ってあげて！

ニークラス 俺のこと、好きかい？

ドルトヒェン もちろんよ！ さあ、行って！

ニークラス それでいて、そんな風に落ち込んでるんだ！

ドルトヒェン あたしを苦しめないで！ あたしはあんたの花嫁だし、明日になればあんたの妻よ。その誓いに口づけしてあげるから、あたしのことは放つといて。

(ニークラスに口づけする。ニークラスは退場する)

そういうわけで、あたしがこんなに長いこと願ひ恐れてたことは、この歌の通りのままでしかないんだわ。

あたしは言ったの もう母さんに
 申し出たの もう夏の盛りが来る前に
 さあ 探して 母さん 娘をひとり
 糸紡ぐ娘 ^{はた}機織る娘を
 あたしはたっぷり紡いだ 白い亜麻
 たっぷり織ったの 目の細かい亜麻布
 白い食卓 磨き上げ
 緑の中庭 掃き上げた
 充分従ったわ 母さんの言いつけに
 今度も充分従わなくては ^{しゅうとめ} 姑様の言いつけに

たっぷり搔き寄せた 野の草
 たっぷり手にしたの 白い熊手
 ああ お前 緑の芸香うんこうの花の環
 頭に戴いたまま やがて色褪せておしまい！
 ああ お前 緑の絹の編み飾り
 日の光を浴びて もう煌めかないで！
 ああ お前 あたしの髪 黄金に輝く髪
 吹き寄せる風に もう靡かないで！
 母さんを訪れる時
 もはや花の環を戴かず 小さな頭巾に包まれるでしょう！
 ああ お前 あたしの頭巾 素敵な頭巾
 吹き寄せる風に なおもはたはた鳴るでしょう
 それに お前 あたしの針道具 色鮮やかな針道具
 月の光を浴びて なおも仄かに光るでしょう！
 お前 緑の絹の編み飾り
 垂れ下がる姿に あたしは涙を流すでしょう
 お前 あたしの指輪 黄金に輝く指輪
 置き忘れられたまま 箱の中で錆びつくでしょう^⑥

父（上がってきながら） どうだい、まるまる太った獲物じゃないか？

ニークラス では、おやすみなさい！

父 皆、おやすみ！ 花嫁にもおやすみを言っとくれ！ ドルトヒェンお嬢ちゃん、おやすみ！ 明日の今時分は――

ドルトヒェン そんな冗談、ご免だわ！ お喋りには全く飽き飽きしてるの。
 明日にはこれよりましなことをしてくれないと、梟ふくろうが花嫁になるかもね。

ニークラス

誰がよかろう 花嫁は？
 梟がよかろう 花嫁は！
 梟 ふたりに応えて
 こう言った
 あたしはとても醜くて
 花嫁なんか なれないの！

誰がよかろう 花婿は？
みそざざい
 鷓鴣がよかろう 花婿は！
 鷓鴣 ふたりに応えて
 こう言った
 俺はととても小さくて
 花婿なんか なれないよ！

誰がよかろう 花嫁の介添えは？
からす
 烏がよかろう 介添えは！
 烏 ふたりに応えて
 こう言った
 あたしはととても黒くて
 介添えなんか なれないの！

誰がよかろう 料理番？
 狼がよかろう 料理番！
 狼 ふたりに応えて
 こう言った
 俺はととても腹黒で
 料理番なんか なれない
 料理番なんか なれないよ！

誰がよかろう お酌番？
 兎がよかろう お酌番！
 兎 ふたりに応えて
 こう言った
 俺はととてもそそっかしくて
 お酌番なんか なれない
 お酌番なんか なれないよ！

誰がよかろう お囃子は？

^{こうのとり}
 鶴がよかろう お囃子は！
 鶴 ふたりに応えて
 こう言った
 俺はとても長い嘴で
 お囃子なんか なれない
 お囃子なんか なれないよ！

誰がよかろう 食卓は？
 狐がよかろう 食卓は！
 狐 ふたりに応えて
 こう言った
 別の食卓 選んできて
 俺は食事を とともにしたい
 俺は食事を とともにしたいんだ！

何がよかろう 嫁入り支度？
 拍手がよかろう 嫁入り支度！
 さあさ 向き直れ
 俺たちの戯れに微笑みかける皆様に
 俺たちは碌な値打ちがないけれど
 お慈悲をお願い申し上げます 万雷の！^⑦

註

- ①誰あろう こんな夜更けに…：ゲーテはこの歌唱劇の中にデンマークや英国、リトアニア、更にはスラヴ系ヴェンド族の民謡を盛り込んで、娘ドルトヒエンの纏綿たる情感を始め、各々の場面に相応しい雰囲気醸し出している。これらの歌は、詩人ヘルダー（Johann Gottfried von Herder: 1744-1803）が収集・翻訳した『民謡集 Volkslieder』（ライプツィヒ 1778-79）から採用されたものである。ちなみに、この『民謡集』はヘルダーの死後『歌謡における諸民族の声 Stimmen der Völker in Liedern』（1807）と改題されて、現在

ではその表題が定着している。ゲーテのこの詩は、ヘルダーが『民謡集』第2部第2巻の27番目に取り入れた『魔王の娘 デンマーク民謡 Erlkönigs Tochter. Dänisch』（各連2行からなる全21連42行詩）——本来は、デンマークの民謡『英雄讃歌 Kjömpe-Viser(Heldenlieder)』（1739）に収載されている「民間伝承バラード Volksballade」からヘルダーが翻訳したもの——にゲーテが着想を得て、換骨奪胎した「芸術創作バラード Kunstballade」となっている。ゲーテは1788年、この詩に『魔王 Erlkönig』という表題を冠して歌唱劇から独立させて、詩集の「バラード Ballade」のジャンルの中に組み入れた。翌89年にはこの詩を含む様々なジャンルの詩を集めた『雑詩集（種々の詩） Vermischte Gedichte』と名づけられた詩集が『ゲーテ著作集 Goethes Schriften』（全8巻 ゲツシェン書店 1787-1790 ライプツィヒ）の第8巻として刊行された。広く人口に膾炙されたこの詩は、僅か17歳のフランツ・シューベルト（Franz Peter Schubert: 1797-1828）による作曲（1815）によって、ドイツ歌曲の歴史に不朽の名を残す、ゲーテの代表的な詩作品のひとつとなった。なお、この詩の解釈および存在意義については、拙稿「ゲーテの詩《魔王》——〈伝承バラード〉から〈創作バラード〉へ——」（大谷大学『大谷学報』第70巻第1号17-37頁 平成4年5月20日発行）を参照されたい。

- ②あのお綺麗な制服：召使いが身に纏う制服を指している。この科白は、収入不安定な田舎漁師であるニークラスが、町に住む召使いの、生活の安定している身分を羨望していることを示唆している。
- ③「ああ母さん…：この詩はゲーテ自身が創作した詩ではなく、ヘルダー『民謡集』第2部第2巻に収載された第26番目の詩「水男 デンマーク民謡 Der Wassermann. Dänisch」（各連2行からなる全17連34行詩）の引用である。
- ④焚き火を起こせ！：ゲーテ自身、『ゲーテ全集 Goethes Werke』（全13巻 コッタ書店 テュービンゲン 1806-1810 第7巻所収）の刊行以来、この箇所以下に以下の脚註を添えている。「厳密に言って、劇全体の効果はこの瞬間に懸かっていた。観客達は蛇行して行く河全体を眼前に見下ろす位置に腰を下ろしていたが、それと気づいてはいなかった。今この瞬間に人々は初めて松明が近くで動くのを目にした。幾度かの呼び声に応じて松明が遠くにも現われ

た。その後で、突き出している岬にチラチラ揺らめく火が燃え上がり、その光と照り返しが間近なものを極めてはつきりと照らし出す一方、周りを取り巻く遠くの一帯は深い闇に包まれていた。これほど素晴らしい効果を目にするのは稀有なことだった。この効果が幾多の変化を重ねながら劇の終わりまで続いた結果、舞台上の情景全体が今一度燃え上がったのだ」。

- ⑤国中を旅する騎士がひとり…：この詩も、ヘルダー『民謡集』第1部第1巻に収載された第21番目の詩「みつつの問い 街角の歌 英国民謡 Die drei Fragen. Ein Straßenlied. Englisch」(各連2行からなる全15連30行詩)の引用である。
- ⑥あたしは言ったの もう母さんに…：この詩も、ヘルダー『民謡集』第2部第2巻に収載された第4番目の詩「婚礼の歌 リトアニア民謡 Brautlied. Lit (th)auisch」(各連2行からなる全14連28行詩)の引用である。
- ⑦誰がよかろう 花嫁は?…：この詩も、ヘルダー『民謡集』第1部第1巻に収載された第24番目の詩「愉快的な婚礼 スラヴ系ヴェンド族の戯れ歌 Die lustige Hochzeit. Ein Wendisches Spottlied」(各連7行からなる全7連49行詩)の引用である。但し、ゲーテは第1-3連で各最終行を削除し、第7連では5-7行目を改作し、更に最終第8連を独自に付け加えて、舞台を見つめる観客にニークラスが語りかける形で劇を締め括る措置を講じている。

附 記

ゲーテは1782年7月22日、イルム河畔にあるティーフルト公園内の自然を背景とした野外舞台で、歌唱劇『漁師の娘』を初めて上演したが、それは、ザクセン・ヴァイマル・アイゼナッハ公国 (das Herzogtum Sachsen-Weimar-Eisenach) の大公妃にして学問芸術の庇護者アンナ・アマーリア (Großherzogin Anna Amalia: 1739-1807) に敬意と感謝の念を表明することにあつた。というのは、26歳の若きゲーテを1775年ヴァイマル公国に宮廷顧問官として招聘したカール・アウグスト公爵 (Herzog Carl August: 1757-1828) の母であり、ヴァ

イマルを「詩神の宮廷 Musenhof」とすることに死に至るまで尽力した大公妃こそは、この歌唱劇の台本を自らの費用で一五〇部印刷させて、この度もまたゲーテを支援した人物であったからである。早くも27日付のある書簡の中でゲーテは、この劇の「大いなる成功」を喜ぶとともに、その上演方法についてこのように語っている。

ティーフルトの舞台向けに私はある喜歌劇を創作したが、これは大いなる成功のうちに上演された。君はその場所をこれほど正確に知っているのだから、その作品を読むに当たっても、あの素晴らしい効果を念頭に置くことができよう。観客達は、河に面した壁が取り払われている苔むした小屋掛けに腰を下ろしていた。小舟が下流から上って来た。とりわけ頼りにしていたのは、合唱の場面となって、辺り一帯が多くの火によって照らされ、人間達によって活気づく瞬間だったのだ。

主役の娘ドルトヒェンを演じたのは、当時ゲーテと親交のあった宮廷歌手コローナ・シュレーター (Corona Schröter: 1751-1802) であり、この歌唱劇の詠唱の作曲自体が彼女の手依るものである。そしてこの作曲に関するゲーテの最も早い報告の日付は1781年8月5日となっている。しかしこの歌唱劇の構想自体は、実はもっと早く、それより3年前の1778年8月22日の夕刻、ゲーテが大公妃アンナ・アマリアを始めとする宮廷の人々をイルム河畔の自分の庭園に招待し、岸辺を照明で飾らせて、客達を歓喜させた時期に遡るものと見られている。客のひとりであった詩人のヴィーラント (Christoph Martin Wieland: 1733-1813) ——大公妃によって1772年、息子カール・アウグストの^ふ傳育官としてヴァイマルの宮廷に招聘された人物——は、27日頃の書簡の中でその時の感銘深い印象をこのように伝えている。

この前の土曜日私達がゲーテのところへ行っただのは、大公妃がご不在の折りにイルム河畔で彼が完成させておいた詩を全てお贈りするために、ゲーテがその夕刻自分の庭園に大公妃をお招きしていたからだだった。…そして今や私達が立ち上がって戸を開けた時、大魔法師の秘かな装置を通して、何と、私達の前に出現したのは、自然の一情景というよりもむしろ、実現された詩的幻影に似た眺めだった。イルム河の岸辺全体が、すっかりレン

ブランド風に照明されていた——明と暗との不可思議な魔法の混淆^{こう}、これこそは筆舌に尽くし難い効果を全体として与えるものだった。大公妃は私達皆と同じように、これにはうっとり^{いおり}とされていた。私達が庵の小さな階段を下り、岩塊と茂みの間をイルム河に沿って、この場所とシュテルン公園の一角とを結ぶ橋に向かって行くと、幻影全体が次第にレンブラント風の幾多の小さな夜景へと溶解した。できることなら永遠に眼前に見ていたかったこの夜景には、私の詩的才能の貧弱さにとっても素晴らしいものと思えた生命と不可思議さが、今やその合い間に逍遙する人々を通して募ってきたのだ。私は食らいつきたいほどゲーテが好きになっていた。

「レンブラント風に照明された——明と暗との不可思議な魔法の混淆」の名状し難い視覚的な効果に意を強くしたゲーテは、遙か後の1807年の作品刊行に際しても、この構想を歌唱劇の山場に脚註の形で（註の④参照）取り入れている。

このような作品成立の経緯から看取される通り、この歌唱劇は野外の舞台のもたらずレンブラント絵画風の視覚的な効果と、その中に挿入される様々な歌謡・歌唱がもたらず音楽の聴覚的な効果との巧みな相乗作用によって、ヴァイマル宮廷の人々の目と耳を楽しませることを主眼として創作された小さな作品であり、いわば即興劇の色合いの濃いものとなっている。この歌唱劇は日常のありふれた些事を巡って筋が面白可笑しく繰り広げられるだけに、時代を超えた普遍的な家庭喜劇となっているが、その具体的な内容自体は、婚礼を明日に控えた漁師の娘ドルトヒエンと、その許婚である仕事一途の若き漁師ニークラスとの、男女の恋愛感情の無邪気な齟齬を巡る発端部における纏れ、および結末部におけるその和解とを主題とする他愛のないものに過ぎない。その点、本来の歌唱劇によく見られる——例えば、モーツァルト（Wolfgang Amadeus Mozart: 1756-91）が作曲した歌唱劇『後宮からの誘拐 Die Entführung aus dem Serail』（1782年7月16日初演）の幕切れでは、「復讐ほど醜いものは何もない」と全員で歌われる——寛容への勧めというような、幾許かの道徳的な教訓を観客に感じ取らせようとする意図は希薄であると思われる。それよりむしろ、深い闇夜に包まれた森と河の風景を背景として娘ドルトヒエンによって歌われる詩『魔王』こそは、その内容の結末が子どもの悲劇的な死で終わるだけに、暗い導入部から明るい終局部へと至るこの歌唱劇の冒頭場面で娘が置かれている鬱屈した感情の雰囲気醸し出すのに、極めて相応しい役割を果たしているも

のと言えよう。まさしく詩『魔王』が作中で歌い上げられたことによって初めて、歌唱劇『漁師の娘』は、後世に残るゲーテの様々な作品群のひとつとなったと言っても過言ではないであろう。

本作品を今回翻訳し、註を作成するに際して、典拠・参考とした『ゲーテ全集』などの文献は下記の通りである。

1. J.W.v.Goethe: Sämtliche Werke nach Epochen seines Schaffens. Münchner Ausgabe(MA) in 26 Bänden. München 1987. Bd.2・1. S.338-356.
2. J.W.v.Goethe: Gedenkausgabe(GA) der Werke, Briefe und Gespräche in 24 Bänden. Zürich 1977. Bd.6. S.895-915.
3. J.W.v.Goethe: Sämtliche Werke. Briefe, Tagebücher und Gespräche. Bibliothek deutscher Klassiker(BdK) in 40 Bänden. Frankfurt am Main 1988. Bd.5. S.269-289.
4. J.W.v.Goethe: Goethes Werke. Bd.7. S.295-321. In: Deutsche National-Lit(ter)atur. Historisch-kritische Ausgabe. Bd.88. Berlin u. Stuttgart.
5. Hans Gerhard Gräf: Goethe über seine Dichtungen. 9 Bände. Frankfurt am Main 1912.
6. J.G.Herder: Werke in 10 Bänden. Bibliothek deutscher Klassiker(BdK). Frankfurt am Main 1990. Bd.3.

劇作品としての読み易さを図るために、下記の措置を講じた。

1. 劇中に挿入されている韻文体の科白については、可能な限り原文に合わせて改行をし、句読点を施さなかった。
2. 註については、作品理解のために最低限必要と思われるものに留め、作品の後に丸囲み番号を付して補った。

なお、翻訳に際しては、先訳『漁師の娘』（佐藤通次譯 『ゲーテ全集』第13巻 87-131頁 改造社 昭和11年7月19日発行）を大いに参考にさせて頂いた。この場をお借りして、厚く感謝の意を表する次第である。

〈キーワード：ゲーテ・歌唱劇・自然と人間〉